

南紀方言における「ノダ」相当形式と終助詞

大野 仁美

キーワード: 「ノダ」相当表現、南紀方言、終助詞、命題処理度

要旨

現代日本語における「ノダ」に相当する形式・表現として、近畿方言には「ンヤ」「ネン」という複数が一体系内に存在することが知られ、それらの異同も分析されている。一方で、和歌山方言には「ネン」は存在しないので、唯一の「ノダ」相当形式である「ンヤ」が、他方言において「ネン」が用いられるような環境にも使われていると予測される。本稿では、野間（2013）による大阪方言の「ノダ」相当形式・表現の分析法を南紀方言の分析に適用・拡大し、大阪方言で「ネン」が利用必須・可能な場合において南紀方言ではどのような表現が用いられるかを考察した。

1. はじめに

現代日本語において、接続する節を名詞化する「ノ」（準体助詞）と助動詞「ダ」が組み合わさった「ノダ」という形式は、さまざまな機能を果たし、日本語文法における研究対象として重要な位置を占めてきた¹。以下の例文(1)と(2)の間に存在する違いをどのように説明するかというのがそこでの大きな課題である。

(1)今日ディズニーランドに行く。

(2)今日ディズニーランドに行くんだ²。

同時に、この「ノダ（口語ではンダ）」に相当する形式や表現が一体系内に複数存在する場合は、それらの間の異同が問題になる。近畿方言では、「ンヤ（＝ノダ）」とその変異形に加え、意味的には「ノダ」と置き換え可能であるが形態上は直接対応していない「ネン（および「～タンヤ」と置き換え可能な「テン」）」が用いられることが知られている。

(3)今日ディズニーランドに行くンヤ。

¹ 田野村（1990）、野田（1997）、名島（2007）などに詳しい。

² 「ノ」によって名詞化された節は□で囲んで示す。「ノダ」は口語の場合「ンダ」と表記する。「ノダ」相当形式・表現には下線を引いて示す。近畿方言の「ノダ」相当形式・表現は例文内においてもカタカナで表記する。

(4) 今日ディズニーランドに行くネン。

近畿2府4県（大阪・京都・滋賀・奈良・兵庫・和歌山）の昔話資料（『読みがたり』）における「ノダ」相当形式・表現の出現を調査した野間（2014）によると、「ネン」と「テン」両方有する地域（大阪・滋賀・奈良・兵庫³）、「テン」のみ有する地域（和歌山）、どちらも出現しない地域（京都）とに分かれる。このうち、京都方言に関しては、「ネン・テン」が大阪から流入したという指摘（中井1997）や、京都市方言における「ノヤ」と「ネン」の違いを分析した論考（松丸1999）がある。和歌山方言に関しては、筆者が南紀で調査している範囲においても「ネン」は出現しない⁴。そこで、本稿は、近畿において「ネン・テン」を使用する中心地域である大阪方言の「ノダ」相当形式・表現と、「ネン」を使用しない南紀方言のそれとを比較することによって、南紀方言における「ノダ」相当形式がどのように用いられているかを明らかにすることを試みる。大阪方言の分析は、野間（2013）による詳細な分析に基づく。そこで導入された「命題処理度」をはかるための心的プロセス（「頭の中の処理」）という概念を利用して、南紀方言の分析を実施する。

2. 近畿方言における「ノダ」相当形式の出現の違い

ここでは、「ノダ」相当形式・表現（以下略して単に「形式」とする）を複数持つ大阪方言においてそれらがどのように出現するかを野間（2013）にしたがってみてゆく。野間（2013）の分析は、現代日本語の「ノダ」を扱った野田（1997）による枠組みを利用してなされているので、まずその枠組みを概観する。

野田（1997）は、「ノダ」をその果たす機能から2タイプに分類した。1つめは、否定や疑問のスコープ（作用域）を「ノ」で名詞化された部分に広げるために用いられるもので、「スコープのノダ」と呼ばれる。否定文では述部が否定されるので、例文(5)は病院に「行っておらず」、「行かない」でいる理由は、今回は「体調が悪」かったからだと解釈される。たとえば、持病があって定期的に通院しているが今回は具合が悪くて行けなかった、という場合や、入院している人の見舞いに行こうとしたが自分の体調が悪くてそれができないでいる、という場合などである。一方、例文(6)において否定されるのは□で囲まれた節全体で、否定のフォーカスは、動詞「行く」の否定（＝「行かない」）以外の、どの要素にも置かれうる。この例では、「体調が悪くて」が否定され、「病院には行った」が、行ったその理由は「体調が悪かった」からではなく、ここで示されていない何か他の理由によると解釈される。

³ ただし出現割合はかなり差がある。野間（2014: 11 表2）の結果によると、出現割合は、大阪>奈良・滋賀>兵庫の順で高い。兵庫における出現数は非常に少ない（ネン 2例（1.9%）；テン 2例（0.5%））。

⁴ 和歌山県において「テン」の使用は確認されているし、野間（2014）も上富田町での使用を報告している。南紀でも周縁的に利用されているが、「テン」を利用する話者は大阪などの関西地域の居住経験者に限られる可能性がある。

- (5) 体調が悪くて病院に行っていない。
 (6) 体調が悪くて病院に行ったのではない。
 (7) 体調が悪くて病院に行ったンヤない。
 (8) *体調が悪くて病院に行ったネンない。

大阪方言では、例文(6)に相当する文において、「ンヤ」は使用できる(例文7)が、「ネン」は使用不可(例文8)であり、「ネン」は「スコープのノダ」相当の機能を持たない。

「ノダ」の2つめの機能は、「ノ」によって名詞化された節を話者の心的態度とともに表出・提示する、と定義されるもので、「ムードのノダ」と呼ばれる。以下の例文(9)~(12)のうち、例文(9)は単に事実を述べている文である。それに対し、「ノダ」相当形式を用いた例文(10)~(12)は、「体が重いと思って体温を測ってみたら熱がある」ことがわかり、自分が風邪をひいた、ということ把握したときや、「なんで昨日欠席したの?」という問いに対する返答として、あるいは誘ってもらったけど「今日は出かけられない」と言った後で理由として用いられる。ここでは、「ンヤ」も「ネン・テン」も両方使用可能である。

- (9) 風邪ひいた。
 (10) 風邪ひいたんだ。
 (11) 風邪ひいたンヤ。
 (12) 風邪ひいテン。

しかし、より詳細に見てゆくと、「ネン」の使用は限られていることがわかる。

「ムードのノダ」はさらに、2つの観点から下位分類される。1つめは、聞き手に向けて情報の提示をする際の心的態度か、話し手が事態の把握をなした際に表出される心的態度かによる分類である。前者を「対人的ムード」、後者を「対事的ムード」と呼ぶ。2つめは、その発話(「Qノダ」とする)に先行してあるいは背後に、Qと関連づけられる事情や状況「P」があるかないかという「関係づけ」の有無である。野田(1997)によるこれら2つの観点からなされたムードの「ノダ」の分類を表1として以下にしめす。

表1 ムードの「ノダ」の分類(野田1997:67 表ウ)

	対事的ムードの「ノダ」	対人的ムードの「ノダ」
関係づけ	Pの事情・意味として Qを把握する	Pの事情・意味として Qを提示する
非関係づけ	Qを(既定の事態として) 把握する	Qを(既定の事態として) 提示する

例文(2)を用いてそれぞれ確認しておこう（以下に再掲する）。たとえば、休日に「ディズニーランドに行く」ことを決めたときの表出としての(2)は「対事的・非関係づけ」の例であり、それを聞き手に既定のこととして提示する(2)は「対人的・非関係づけ」の例である。また、近所の子供連れの家族が出かけていくのを見て、「ミッキーマウスの帽子かぶってる」と認識（・表出）したあとの(2)は「対事的・関係づけ」の例であり、「帰りが遅くなるから晩ご飯はいらぬ」ということばの後で家族に伝えられる(2)はその理由として解釈され、「対人的・関係づけ」の例である。

(2) 今日ディズニーランドに行くんだ。

この枠組みを利用して、松丸（1999）は京都市方言の、野間（2013）は大阪方言の「ノダ」相当形式である「ノヤ（～ネヤ～ネンヤ）」と「ネン・テン」の使用の可否を分析した。両者の結果は共通しており、大阪方言と京都市方言において「ネン・テン（以下両者を合わせて「ネン」とする）」の使用範囲は「ノダ」よりも狭い。先に見たようにスコープを拡大する機能はなく、また関係づけの有無に関わらず対事的モードでは用いられない。両方言において、「ネン・テン」は対人的モードの機能を果たすものとしてのみ用いられる（表2）。

表2 京都市方言（松丸 1999: 69）と大阪方言（野間 2013）における
ノヤ・ネンの出現

	スコープの「ノダ」	ムードの「ノダ」			
		対事的・非関係	対事的・関係	対人的・非関係	対人的・関係
ノヤ	○	○	○	○	○
ネン	×	×	×	○	○

○: 使用可 ×: 使用不可

先の例文(2)を利用して以下にそれぞれの例を示しておく。

<対事的・非関係づけ>

(13) (思いついて) *今日ディズニーランド行くネン。

<対人的・非関係づけ>

(14) (聞き手に向かって唐突に) 今日ディズニーランド行くネン。」

<対事的・関係づけ>

(15) (近所の子供連れが出かけるのをみて)

ミッキーマウスの帽子かぶってる。*今日ディズニーランド行くネン。

<対人的・関係づけ>

(16) 「遅くなるから晩ご飯食べて帰る。今日ディズニーランド行くネン。」

これらの形式の使用の可否において「関係づけ」の有無は関与しないので、本稿ではこのあと両者の区別はしないことにする。

このように、大阪（および京都市）方言では、「ノダ」相当の形式として「ノヤ～ンヤ～ネヤ～ネンヤ」に加え「ネン」が存在しており、これらは「対人的ムード」において共存している。とすると、「対人的ムード」におけるこれら両者の使い分け・意味の違いが問題になる⁵。

3. 「ノダ」相当形式と「命題処理度」

野間（2013）は、「ネン」形式分布の中心地であると思われる大阪方言において、「ノダ」に相当する形式間に使い分けがあり、両者が必ずしも置き換え可能ではないことを指摘している。野間（2013）は、それを説明するのに、「命題処理度」という概念を導入している。野間（2013）の議論を追ってみよう。

以下の例文において、現代日本語ではすべて「ノダ」の使用が可能である。

(17) (唐突に) 実は私今日誕生日なんだ。(野間 2013: 12 例文(34))

(18) A: Cさんはどこに行ったの？

B: Cさんは今いないよ。買い物に行ってるんだ。(野間 2013: 12 例文(35))

(19) A: Cさんはどこに行ったの？

B: そういえばどこに行ったんだろう。あ、さっきまでここにあったCさんのかばんがない。たぶん買い物に行ってるんだ。(野間 2013: 12 例文(36))

しかしながら、大阪方言においては以下のように使用制限があるのだという。

(20) (唐突に) 実は私今日誕生日{??ナ}ンヤ/??ヤネヤ/??ヤネンヤ/ヤネン}。
(野間 2013: 15 例文(37))

(21) A: Cさんはどこに行ったの？

B: Cさんは今いないよ。買い物に行ってる{?ンヤ/ネヤ/ネンヤ/ネン}。
(野間 2013: 15 例文(38))

⁵ 「ノダ」相当形式間の意味の異同に関しては、例えば以下のような言及がある。

- (i) 「ノヤ」は「のだ」に相当し、「ネン」は「のだよ」に相当するので、両者の意味は「ずれ」ているが、どのようにずれているかは未詳。(京都方言について、中井 1997: 21)
- (ii) 「ネン」は、「ノヤ」に比べ断定機能が弱化・軟化している(播磨方言について、神部 1996)

南紀方言の分析を通してこれらがとらえている現象の精緻化を次稿では試みたい。

- (22) A: Cさんはどこに行ったの?
 B: そういえばどこに行ったんだろう。あ、さっきまでここにあったCさんのかばんがない。たぶん買い物に行ってる{ンヤ/ネヤ/ネンヤ/?ネン}だ。
 (野間 2013: 15 例文(39))

これらの例文における「ノダ」相当形式の使用制限を説明するのに、野間 (2013) は「命題処理度」という概念を用いる。これは、どのような心的プロセス (野間の用語では「頭の中の処理」) を経てその発話がなされているかを分解してとらえ、その処理量の多寡を示すものである。そして、野間 (2013) はその処理度と「ネン」や「ンヤ」の使用選択が関連していると主張している。

「命題処理度」を、例文を用いて説明しよう。まず例文(20)・(21)と(22)を比べる⁶と、話し手がすでに認識済みのことを伝えるのと、新規に認識したことを伝えるのとでは、後者には「認識する・事態の把握に至る」というステップが追加されるため、処理度が大きい。また例文(21)では、話し手が既に認識していたが、不活性になっていた概念・情報を、会話進行時に再活性化するという段階がはいる。ただしこのプロセスのために必要な処理度は、新たに認識に至るプロセスより処理度は小さいと考えられる。

野間 (2013) は、これらの例文の「命題処理度」を模式図 (2013: 14 図1) をあげて詳細に説明している。そこではいくつかの心的処理 (「頭の中の処理」) のプロセスがあげられており、処理度はプロセスの合計ではかれる量的な指標のようである。

表3 大阪方言の「ノダ」相当形式と命題処理度スケール
 (野間 2013: 15 表6に基づく)

	対事的 ムード	対人的ムード		
		大 ←		→ 小
		命題処理度		
		例文(22)	例文(21)	例文(20)
ノヤ	○	○	?	??
ネヤ	○	○	○	??
ネンヤ	○	○	○	??
ネン	×	?	○	○

○: 使える ? : 不自然 ?? : かなり不自然 × : 使えない

⁶例文(21)・(22)は質問に対する返答だが、例文(20)は「唐突に」新しい話題を提供した発話である。質問に対する返答には相手の質問を処理してそれに合致する回答を生成するという複雑な心的プロセスがあるはずだが、そのようなインタラクションにかかわるプロセスは、野間 (2013) は対象外としているようである。それに従い、本稿でもあつかわない。

それぞれの例文における「命題処理度」は、これらのプロセスを合計したもので、例文(22)>例文(21)>例文(20)の順に大きいと考えられる。このスケールが、対人的ムードの機能を持つ「ノダ」相当形式のうちどれを選択するかと連動しており、ノヤ(ンヤ)>ネヤ・ネンヤ>ネンの順に、左側に位置する形式はより命題処理度が高い場合に用いられると野間(2013)は指摘する。表3として、野間によるまとめをあげておく。

ところで、この結果から、対事的ムードと例文(22)に重要な共通点があることがわかる。野間のモデル図からそれぞれの例文において行われているとされる心的プロセスを抜き出しそれぞれA・B・Cとして表4に提示してみよう。野間のモデル図でも明示されていることだが、対事的ムードと例文(22)は、ともに「話し手が、認識していなかった事態・事情を把握する」という心的プロセスを共有しており、なおかつ「ネン」の使用が不可・あるいは不自然という特徴を共有している。野間(2013)の分析では、「命題処理度」という概念を対事的ムードの使用の説明には適用しないので、対人的ムードと対事的ムードは別個に扱われることになり、この共通点に照準を合わせることができない。一方で、「命題処理度」という概念を対事的ムードに適用すると、命題処理度は小さい(少なくとも例文(22)よりは小さい)のに「ンヤ」を使用するので、「命題処理度が大きいほど「ンヤ」を使用し「ネン」を使用しない」、という一般化はできなくなる。

表4 大阪方言の「ノダ」相当形式の使用と命題処理度
(野間2013:14 図1より作成)

命題処理のプロセス		対事的 ムード	対人的ムード		
			例(22)	例(21)	例(20)
A 聞き手が認識していない事態 の聞き手への提示		-	✓	✓	✓
B [聞き手が認識していない事態]の認識の活性化		-	-	✓	-
C(話し手が認識していなかった事態)の把握		✓	✓	-	-
使用する形式	ンヤ	○	○	?	??
	ネヤ・ネンヤ	○	○	○	??
	ネン	×	?	○	○

○: 使える ? : 不自然 ?? : かなり不自然 ×: 使えない

✓: 関与する - : 関与しない

事態: 話し手が処理済みの情報

[事態]: 話し手が知っているが意識されていない情報

しかし、「命題処理度」を考えるにあたり、プロセスは量的に加算されるものではなく、それぞれ質的なちがいがあつたものととらえ、たとえばこの中ではCが特定の形式に関わつている（ここでは「ンヤ」の使用と「ネンの不使用」）と考えると、全体を統一的に捉えられるようになるかもしれない。この検討は今後の課題としたい。

4. 南紀方言の「ノダ」相当形式

先に述べたように、和歌山方言には「ネン」という形式は存在しない。したがつて、現代日本語において「ノダ」を用いるケースは、和歌山方言ではすべて「ンヤ」が対応するのではないかと予測できる。大阪方言において「ネン」を用いるケースでも、「ネン」が存在しない以上、「ンヤ」を用いることになるのではないかとつていふことである。しかし実際には、大阪方言で「ネン」が用いられているケースにおいては南紀方言でも「ノヤ」が使いにくいようである。

まず、前節で利用した例文(17)～(22)を再度用いて、南紀方言でそれに対応する表現を以下みてゆく。南紀方言では、その発話の後の展開をどう期待しているか、発話前の状況がどうかによつて用いられる形式は影響を受けるので、それらの分析のために、その情報も含めてより詳細に記述する。

まず、何の前触れもなしに唐突に新しい話題を導入するケースをみてみよう。

(17) (唐突に) 実は私今日誕生日なんだ。 (野間 2013: 12 例文(34))

(20) (唐突に) 実は私今日誕生日{??ナ}ンヤ／??ヤネヤ／??ヤネンヤ／ヤネン。

(野間 2013: 15 例文(37))

南紀方言でこれらに相当する可能性のある表現は複数存在するので、さらに詳しい状況説明がないとどれが適切か決められない。

南紀方言

(23) (唐突に) 「実は私今日誕生日な~~ンヤ~~↑。」

(24) (唐突に) 「実は私今日誕生日な~~ンヤ~~↓。」

(25) (唐突に) 「実は私今日誕生日な~~ンヤ~~ケド (ヨ)・・・」

上昇イントネーション「↑」を伴う例文(23)は、この事実を告げた後の展開についてはプランをもつておらず、さらに後続して提示されることを待っている追加情報は準備されていない。相手の反応も淡白な、言つてそれで終結するような軽いお祝い（例：「あ、そうなんや、おめでとう」）などがふさわしい。一方、下降イントネーションを伴う(24)の場合は、誕生日であるという事実を聞き手に提示するだけでなく、さらにこれに直接関わる情報、たとえば「(だから) 帰りに買い物していくんだ」等が後続すると感じられる。それが聞き手の関わりを要求するかどうかは、さらに聞き続けるとわからない。まだ情報が続くと感じられるので、期待される聞き手の反応はあいづち、あるいはお祝いだが、その後も聞き手は話し手の次の情報提供を待つことになる。

さらに接続助詞ケド（＋終助詞ヨ）が付加された場合（例文 25）は、この発話自体がなにか主要な他の情報の背景を形成することになる。しかも、後続する情報は、「話し手の誕生日であること」とは直接関係がなく、聞き手と関わる事柄である可能性が高い。たとえば、「それで早く帰りたいんだけど大丈夫かな？」など、その代償を聞き手に依頼するようなケースが予測される。聞き手の期待される受け答えは、やはり例文(24)と同様に、軽い反応をして話し手が次の情報を提示するのを待つ姿勢を見せることである。例文(24)と(25)の違いは、後に続く情報が、(24)の場合は直接関連のある追加情報であること、(24)の場合は、自然に連想できるようなものではないこと（あるいはそのように演出されていること）、である。

次に、例文(21)の対応例を考えてみる（ただし、南紀方言では「行ってる」は言いにくいので、「行った」で代用し、例文(21')とする）。この文脈で「ノダ」相当形式は出現しづらい⁷。

- (21') A: Cさんはどこに行ったの？
B: Cさんは今いないよ。買い物に行った{?ンヤ/ネヤ/ネンヤ/ネン}。
(野間 2013: 15 例文(38)より一部変更して作成)

南紀方言

- (26) B: Cさん今おらん(よ⁸)。買い物へ行ったデ。‘買い物に行ったよ’
(27) B: Cさん今おらん(よ)。買い物へ行ったンヤ(デ)↑。
(28) B: Cさん今おらん(よ)。買い物へ行ったンヤ(デ)↓。

現代日本語では「ノダ」が出現するとされるケースだが、南紀方言ではここで通常「ノダ」相当形式は用いない。「Cさんは出かけて今不在である」ことを話し手 B が了解している場合、現代日本語で「買い物に行った(よ)」に相当する表現で伝えるのがもっとも自然である。

⁷ なお先に述べたように、和歌山県方言では「ネン」は用いられず、周辺的に「テン」が用いられている。筆者が収集した談話資料においても「テン」の使用例が数例見られる。以下の例は、ちょうど例文(21')に対応する表現にあたるものである。

「テン」の使用例 (201502_YK_OH, YK26)

OH: それはでも…そこに行くのは難しいんやでっていうのは誰が思うてたん？
(201502_YK_OH, OH26)

YK: おじいちゃんが言うテンや。つぶやいたのを聞いてテン。

‘おじいちゃんが言ったんだ。つぶやいたのを聞いていたの(だよ)。’

(201502_YK_OH, YK26)

⁸ 聞き手が「Cさんがいない」ことに気がついているので、ここでは終助詞を用いないか、用いるとしたら（聞き手が認識していない情報を伝える「デ」ではなく）、話し手がつ情報聞き手がそのまま受け入れるようにと伝える「ヨ」である。

「ンヤ」を用いるのは、「Cさんの不在」と「Cさんが買い物に行く」という2つの事象を聞き手が結びつけていないような状況である。ここで「ノダ」相当形式が出現しにくいのは、通常この2つの事象が容易に関連づけられるからであろう。たとえば、「Cさんは普段出かけない人で、いつもここにおいて、留守にすることはない」状況にあったり、「Cさんとここでこの時間に会う約束があるから、Cさんは私と会うためにここにいるはずなのに」なぜか今は不在である、などという状況があれば、「ノダ」相当形式は出現しやすい。

また、「ンヤ」が使われる場合、上昇イントネーションなら、先に見た場合と同様に、その後さらにことばのやりとりが続くことを想定していない。「Cさんが買い物に行く」ことが、考えられる範囲内のことで、聞き手がそれを受け入れるのに追加の情報は不要である、などの場合が想定できる。一方下降イントネーションなら、聞き手が状況を怪訝に思いうまく消化できていないことを見てとって、自分が知っている情報を提示してもそれだけでは納得させられないかもしれず、さらに追加情報が必要かもしれないと想定している。あるいは、「そもそも今日Cさんは出かけることになっていて聞き手はそれを知っているはずなのに忘れたのかな」、などという疑念をもって聞き手に伝えるような場合などが考えられる。

ここではいずれの場合も、「ンヤ」は終助詞「デ」と親和性が高い。例文(26)は現代日本語の「買い物に行ったよ」に相当するが、現代日本語の終助詞「ヨ」に置き換えられる南紀方言の終助詞には「デ」「ワ」「ヨ」「ガイ」があり、それぞれ意味が異なる (cf. 大野 2010) ので、「ノダ」相当形式の意味を検証するのに終助詞との共起の可否を利用できる。これらのうち、既に自分が知っている情報を聞き手に提示する際に用いられるものは「デ」なので、このケースにちょうど合致する。

次に、例文(22)はどうか。これは、Cさんが出かけたことを話者Bも事実としては知らず、状況から考え推論して「買い物に行った」と判断する、というケースである。この場合は、話し手は「認識していなかった事態や状態を把握」するというプロセスを経ており「ンヤ↓」を用いるのがもっとも自然である。

(22) A: Cさんはどこに行ったの?

B: そういえばどこに行ったんだろう。あ、さっきまでここにあったCさんのかばんがない。たぶん買い物に行ってる。ンヤ/ネヤ/ネンヤ/?ネンだ。
(野間 2013: 15 例文(39))

南紀方言

(29) A: Cさん どこへ行ったん?

B: そういえばどこへ行ったんやろ。あ、さっきまでここにあったCさんのかばん、ない。たぶん買い物へ行ったンヤ↓(デ/ワ)。

さらに、ここでは終助詞「デ」と「ワ」が共に使用可能である。「デ」を用いた場合は、自分の到達した推論の結果を提示しそれを聞き手が受け入れるかどうか確認している。「私

はこう思うけど、あなたはどう思うか？」と提示し、それに同意するかどうか判断することを促している。終助詞「ワ」は、自分が新規に把握した情報を出表する際に付加されるもので、その際聞き手がいても、聞き手がそれを受け入れるかどうかは関与しない。

ここまで、野間(2013)が大阪方言の「ノダ」相当形式間の意味的異同を分析するのに用いた枠組みと例文を借りて、「ネン」をもたない南紀方言の「ノダ」相当形式の用いられ方を見てきた。そして、「心的プロセス」として「話し手が認識していなかった事態の把握」に至ったことを提示する場合は、大阪方言では「ネン」が使用できず、南紀方言でも「ンヤ↓」がぴったりとあてはまる(例文29)。南紀方言においては、命題処理のための心的プロセスのステップの多寡ではなく、まず第一に「話し手がまだ認識していなかった事態の認識に至り把握する」というプロセスの有無によって「ンヤ↓」の使用が決定されると言えるだろう。

一方、「聞き手が認識していない事態の聞き手への提示」の心的プロセスを経る例文(20)と、それに「聞き手が認識していなかった事態の認識の活性化(情報の活性化)」のステップが追加される例文(21')に相当する南紀方言の表現を複数の候補から確定するには、発話に至る状況の説明がさらに必要であった。それは、「発話後の展開をどのように見通しているか」ということである。そしてそこで、「ンヤ」の使用は、提示される2つの状況間に直接的な論理的関係がある場合には不自然であることがわかった。ここでもう一度それを確認しておこう。

たとえば、以下のような状況を想定してみよう。Aが帰宅後食べようと思って朝お菓子を冷蔵庫に入れて出かけ、帰宅して冷蔵庫の中からそれがなくなっているのに気がつく。あれ、と思っているところに、家で一人で留守番をしていたBが台所にやってきて、そのお菓子を自分が食べてしまった、と告げるには、例文(30)が適切で、例文(31)は不自然である。それは、お菓子がないという事実の実現が、家に一人でいたBがそれを食べてしまったことによるというのは、間になんら想定外の推論を必要としない、一直線で結びつけられる結論だからだと考えられる。例文(31)を適格にするためには、さらになにか通常の想定外の情報の存在がなければならない。

(30)「お菓子ないで。食べてしもた(デ/ヨ)。」‘お菓子ないよ。食べちゃった(よ)。」

(31)「お菓子ないで。食べてしもたンヤ。」‘お菓子ないよ。食べちゃったんだ。」

(32)「お菓子ないで。友達来たンヤ。」‘お菓子ないよ。友達が来たんだ。」

一方、例文(32)の場合、「お菓子がない」という事象と「友達が訪ねてきた」という事象は、本来ならまったくお互いに関係のない2つの別々のできごとである。その間を結びつけるのに、「友達が何かふるまおうと思った→提供できる自分のものはなかった→家にあった、Aがとっておいたお菓子を出した→それを食べた」という段階がはいってようやくこの2つの命題が論理的につながる。このような場合でないと、南紀方言では「ンヤ」は使にくいようだ。

4. むすび

南紀方言における「ノダ」相当形式がどのような意味・機能をもつのかを、体系の異なる大阪方言の分析をもとに、考察した。現段階で得られた結論は以下の通りである。

①「話し手が認識していなかった事態の把握」に至るという心的プロセスと「ンヤ↓」の使用は強固にむすびついている。

②その一方で、それ以外の、つまり大阪方言で「ネン」が使用必須・可能になる環境においては、「ノダ」に対して「ンヤ」が常に置き換え可能なわけではない：

- a. なんらかの論理的飛躍がなければ結びつかない命題をつなぐ場合には「ンヤ」が用いられる。
- b. 命題間の直接的な結びつきが明白な場合は「ンヤ」の使用が不自然である。

また、②において、「ノダ」相当形式を含む文の意味の分析・検証するのに、終助詞との共起可能性を利用する効果が確認できた。

今回の分析は、非常に限られた量の例文の分析に基づいているので、今後もさらに対象を拡大し議論の精緻化を進めたい。

参考文献

- 大野仁美 (2010) 「南紀方言における終助詞「ヨ」の意味機能分析試論」、上野善道監修『日本語研究の12章』210-223、明治書院。
- 神部宏泰 (1996) 「播磨方言における断定辞の推移—「ネン」「～テン」の成立とその機能」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点』63-79、明治書院。
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法Ⅰ 「のだ」の意味と用法』和泉書院。
- 中井幸比古 (1997) 『日本のことばシリーズ26 京都府のことば』明治書院。
- 名島義直 (2007) 『ノダの意味：機能—関連性理論の観点から—』くろしお出版。
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版。
- 野間純平 (2013) 「大阪方言におけるノダ相当表現：ノヤからネンへの変遷に注目して」『阪大日本語研究』26: 53-74。
- (2014) 「近畿方言におけるネン・テンの成立—昔話資料を手がかりに—」『阪大日本語研究』25: 51-69。
- 松丸真大 (1999) 「京都市方言における『ノヤ』『ネン』の異同」『阪大社会言語学研究ノート』1: 61-73, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室。

付記

本稿は、科研費(挑戦的萌芽研究 25580092)をうけて実施した研究の成果の一部である。